

教育開発推進機構 NEWSLETER

教育開発ニュース

VOL. 5
NEWSLETER

KOKUGAKUIN University 平成24年（2012）1月30日

目次

- 「学生主体型授業」の試み—山形大学の事例から— 中山 郁…………… 2p
- ハッピースクールライフ—卒業への一歩—…………… 5p
- 特集「どうですか、國學院は？—新任教員の感想記—」
 - 池上 英洋（文学部）…………… 12p
 - 尾崎麻弥子（経済学部）…………… 13p
 - 寺本 貴啓（人間開発学部）…………… 14p
- シリーズ「大学授業最前線—教員の努力！学生のまなざし！—（5）」
 - 教員の授業努力 中川 孝博（法学部）…………… 15p
 - 受講学生からのコメント…………… 17p
- 教育開発推進機構彙報（平成23年7月1日～12月31日）…………… 19p
- 教育開発推進機構 新任職員紹介…………… 20p
- 啐啄同時—編集後記—…………… 20p



國學院大學教育開発推進機構

「学生主体型授業」の試み—山形大学の事例から—

教育開発推進機構准教授 中山 郁

各地の大学で「学生主体型授業」という取り組みがなされるようになってきている。この試みは「学生参加型授業」「双方向性授業」「PBL（問題解決型授業、プロジェクト型学習）」などと共通する要素を持つが、「学生の主体性の育成」を正面から授業の目標に掲げる点にその独自性がある。そのため、このタイプの授業では、ディベートや課題発表はもとより、街の模型製作、野外活動、市民を対象としたイベント企画等、様々な要素を取り入れている。

昨年7月、本機構では、山形大学におけるFD活動のリーダーである小田隆治教授をFD講演会にお招きし、同大学における学生主体型授業の実践について紹介して頂いた。すると、本学教職員から多大の関心が寄せられたのである。そこで、授業運営の方法や、参加する学生たちの反応をじかに知るため、昨年12月9日に、加藤季夫機構長、新井大祐助教、筆者の三人で、山形大学小川川キャンパスにお邪魔して授業を見学させて頂いた。



■「教養セミナー」の基本構成

今回我々が見学させて頂いた授業は、山形大学基盤教育院（同大の教養教育担当部署）が運営する基盤教育科目（本学における教養総合科目に相当する）の中の学生主体型授業「秋からのキョウヨウ教育必勝法D（教養セミナー）」（担当・杉原真晃准教授）である。この授業は、学生自身が自由なテーマで知りたいことを探究し、最終的にその成果を発表するもので、大きく分けて「個人探究」「グループディスカッション」「全体でのプレゼンテー

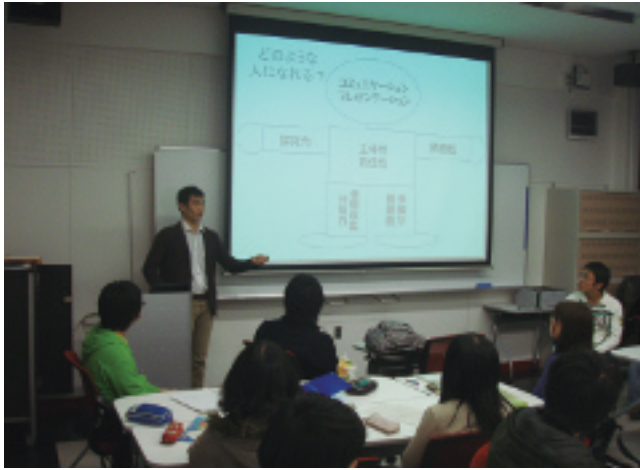
ション」から成る。具体的には、全15回の授業のうち、第1、2回で学生が各自のテーマを決定し、第3～13回に毎回グループ発表・意見交換を行い、さらに中間発表をしつつ内容を練り上げ、第14、15回目に全員が最終発表を行うという構成をとっている。

中でも特に注目すべきは、ほぼ毎回行われる学生たち自身によるグループ学習という仕掛けであろう。学生たちは毎回の授業に参加するに当たり、必ず授業時間外に文献・テレビ・インターネット、実体験等、様々な媒体から知識・情報を収集して、自分の課題に関する報告の準備を行う必要がある。グループは4、5人一組の編成だが、毎回組み替えがなされることから、学生たちは常に、学部も性別も価値観も異なるメンバーと、意見交換や議論を繰り返してゆくことになる。このようなグループでの議論を通じて、自身の探究成果を充実させるとともに、多様な価値観・生き方に触れ、自らの価値観・生き方を省察することが期待されているのである。さらにはFacebookを活用した授業外学習を支援するシステムも準備されており、これを用いて、前回の授業の振り返りや、次回の授業の学習目標を設定することも求められている。

■活発なグループ討議

「それではグループになって下さい」授業開始後ほどなく、杉原准教授が合図をすると、学生たちは馴れた様子で机と椅子を並べ替え、その日のグループメンバーと向かい合わせに座った。互いに自己紹介をしてから、その日の司会とタイムキーパーを決め、1人10分の持ち時間で、その週の探究成果について報告を開始する。我々も、計7組に分かれた各グループに混ぜてもらい、彼らの報告と討論を聴かせてもらった。

学生たちのテーマは「容姿」「アドレナリン」「原発」「女子力」「アマゾンの配送システム」など、実にさまざまである。さらに報告の内容も、テーマに対してひとつの切り口から調べるというのではなく、多様な視点からアプローチを試みるものが多いように感じられた。例えば「容姿」をテーマとする学生は、前回は容姿が自身にもたらす心理的影響について報告したが、今回は生物学



的な観点から容姿について考察するために、原人から新人に到るまでの頭蓋骨の変遷について調べ、報告をしていた。

こうした対象への複眼的アプローチは、グループ学習における多様な質問・意見の交換に触発されている部分が非常に大きい。発表者に対する参加者からの「そういえば、こういう考え方もあるよね」という反応が、発表者のそれ以降の探究に、新たな視点を付け加えることも決して珍しくないのである。

また、学生にとってグループ学習は、異なる発想や視点との出会いの場ともなっている。別のグループでは「女子力」に関する報告をうけ、次のような会話が交わされていた。

学生 A 「すると、女子力って、やはり外見が大事なんですか？」

学生 B 「具体的にはどういった要素から成っているのかな？考えられるのは容姿、料理……そういったものを総合したもの、ということ？」

学生 C 「料理をやらんとならんということは、差別につながるのでは？」

学生 D 「オレは、差別と考えられるという、そういう考え方もあるということに驚いた！」

上記の会話は、あるいは、学生 D 君が初めて「ジェンダー」による差別という発想と出会った瞬間であったかもしれない。

このように学生たちが議論を繰り広げている間、担当の杉原准教授は絶えずグループを巡回しつつ、必要に応じてアドバイスをする。ただし、議論の中身には深く介入しない。教員は、授業開始時に作業手順を示し、終了時には総括を行うが、討議の間は「教える」存在として

ではなく、あくまで助言者（ファシリテーター）としての役割に徹するのである。

■学生たちの反応

終了後、何人かの学生たちからこの授業の感想を聞かせてもらった。皆、大変熱心に授業に取り組んでいた。無論、好きなテーマについて自分で探究する以上、熱心になるのは自然なことかも知れないが、必ずしもそれだけではなさそうである。ある学生は「自分が選んだテーマ以上に、作業自体が好きです」と語っていた。この学生は報告の準備を前日に行うが、調査はもとより、発表方法や話し方を練り込むなど、事前準備に3時間はかけるといふ。学生たちは、調査、報告の準備、授業時の報告や討議といった作業を通じて知識が増えてゆくこと、また、発表や話し方などのスキルが身につくことに、やりがいと楽しさを感じているのである。

学生たちは「他の授業では作業が少ないため、この授業を通じて能力がつくのが楽しい」と言う。「もちろん作業はつらい事もある。けれども、それを乗り越えたところで自分が育つという手応えも感じる。多分、この授業をやり終えたら、自分がこれだけのことをやったな、という自信につながると思っている」。だからこそ、真剣に授業に取り組む事ができるのだという。このような感想からは、授業を通じて主体的な学習方法を身につけてゆく過程で、学生たちが自らの成長を実感していることが窺われる。このことが、授業に対する強力なモチベーションを引き出しているのであろう。

■学生主体型授業の浸透を支えるもの

小田教授によると、山形大学における学生主体型授業の試みは、平成12年頃から始まったという。当時、北海道大学医学部の阿部和厚教授（当時）が行っていた学生主体型授業の存在を知った小田教授が、試験的に学内で実施したところ、学習効果も学生側のニーズもあることが明らかとなったことから、導入が進められたとの事である。今やこのような授業形態は同大の中で次第に増える傾向にあり、特に元々ディベートや発表を重視していた授業に関しては、かなり浸透してきているという。しかも、こうした学生主体型授業の展開は、大学当局によるトップダウン方式で一斉に進めたのではなく、例年、シラバスを見るたびに自然に増えてきている印象があるという。



では、なぜ山形大学において学生主体型授業が普及していったのであろうか。この種の新しい形態の授業が展開されるためには、もちろん、学生側のニーズや教員側の教育効果に対する想いという要素も重要である。しかし、学生主体型授業のように一定のスキルを必要とする授業を展開させるためには、教員がそうした学習方式に馴染み、学ぶ機会を確保することもまた重要になって来よう。

小田教授は、山形大学における学生主体型授業の浸透を支えているのは「FD 合宿セミナー」の存在であると述べる。同大では平成12年から、ワークショップを主体として構成した、合宿形式のFD研修を開催している。一般にワークショップは、参加者をグループ分けして、限られた時間の中で与えられた課題について討議を行い、その成果を全員の前で発表して知見を共有する形で運営される。学生主体型授業の運営方法は、こうしたワークショップの運営方法が基礎となっているのである。つまり、FD合宿セミナーに参加した教員たちは、教育に関するトレーニングを受けつつ、同時にワークショップという授業形態を体験し、その運営方式をも学ぶことになる。その経験が、ワークショップの方式を援用しながら新たに学生主体型授業を設計し、実施するという方向へと活かされてゆくのだという。

■メリットと課題

小田教授によると、学生主体型授業を行う場合、事前に綿密な授業の作り込みを行う必要があるものの、授業運営自体は講義方式よりも楽であるという。つまり、学生主体型授業とは、学生が楽しみながら主体的に学び、教員も楽しみながら教え、過度の負担がかからない、双方にとって魅力的な授業を展開できる可能性を持っているというわけである。

その一方で、もちろん、課題も多いという。特に、授業に参加する学生個々のモチベーションを喚起し、性格の多様さにも対応しつつ、積極的に授業に取り組んでもらうための仕掛け——学生による相互評価や、質問の点数化など——を準備しておく必要があるという。また、筆者が他大学の例として聞いたところでは、受講学生が学生主体型授業に力を集中しすぎ、他の授業が疎かにな

る場合もあるという。

しかし、学生の主体的な課題探求能力を高め、彼らが自身の成長を実感できる学生主体型授業は、これからの大学教育の中で大きな役割を担うはずである。なぜならば、今や日本の大学は、多様化した学生たちに対して、主体的に考え行動することの重要性や、学問の魅力を伝えるために、積極的に工夫してゆくことが不可欠な状況に置かれているからである。

さらに、従来も、また現在も、少なからぬ数の教員たちが創意工夫をこらした授業を行っている。本学においても、そうした授業改善の試みが次第に目につくようになって来ているが、それが期せずして、学生主体型授業と呼ぶに相応しいものとなっていることも少なくない。そうした教員たちの熱意と努力を、いかに大学全体で後押しするか。それもまた、重要な課題であると言えよう。

■おわりに

限られた人的資源と施設しか持たない私立大学において、講義型の授業は今後も必要不可欠である。しかし、初年次教育や演習科目などの少人数授業の内容を充実させる上で、学生参加型授業の方法は極めて有効なのではないだろうか。そのような印象を強く抱いた。

参考文献：小田隆治・杉原真晃『学生主体型授業の冒険
自ら学び、考える大学生を育てる』平成22年、
ナカニシヤ出版



ハッピースクールライフ ～卒業への一歩～

本記事は、『教育開発ニュース』Vol.3に引き続き、SA（スチューデント・アシスタント）が企画したものです。今回は、SA自身がこれまでに経験してきた大学での学びについて、語り合うなかから生まれてきたさまざまな意見を、架空の人物の会話というかたちでまとめてもらいました。



[登場人物]



ヒロシ
(1年生・卒業できるか不安)



ユウタ
(2年生・お調子者で要領が良い)



リョウコ
(3年生・まじめで優等生)



プロローグ ～ある日の昼休み～



ヒロシ「あ、ユウタ先輩、リョウコ先輩。こんにちは……」

ユウタ「よう、ヒロシ。って、どうした？ なんだか元気がないな」

リョウコ「風邪でもひいてしまったの？」

ヒロシ「ううー。先輩方どうしましょう。僕、卒業できないかもしれません！！」

ユウタ「なんだなんだ？ どうした？」

ヒロシ「今日、いろいろ友達と話したんですけど、そいつはなんか、これから4年間で取る単位をほとんど決めちゃって……」

ユウタ「自分は分からないから、卒業できないかもって思っちゃったんだな？」

ヒロシ「そうです」

リョウコ「じゃあ、ヒロシくん、卒業するためにどうすればいいのかわからないのか、私たちと考えていきましょうか」

ヒロシ「ありがとうございますリョウコ先輩！ 成績優秀で先生からの信頼も厚い先輩が相談に乗ってくれるなんて！！」

ユウタ「俺も、仕方ないからヒロシに力貸してやるよ」

ヒロシ「あ、ありがとうございます」



1. 大学を卒業するために

リョウコ「さてヒロシくん、大学を無事卒業するためにはどうすればいいかしら？」

ヒロシ「え？ いきなりそれですか？ えっと授業に出る??」

ユウタ「授業に出るだけじゃだめなんだよ。高校と違うんだからさ。自分で授業も選ばなきゃいけないんだぜ？」

ヒロシ「うーん。た、単位を取る」

リョウコ「そう、大学ではね、卒業するために必要な条件というものがあるの。二人とも要卒単位というものをご存知？」

ヒロシ「よ、要卒単位ですか？ あの、履修要綱に載っている……」

ユウタ「専門科目64単位、教養総合科目36単位は絶対取らなきゃいけないって、最終的に124単位取る必要があるってやつですね」

リョウコ「足りない単位を共通領域でうめるって手もあるわね」

ヒロシ「え？ 共通…？」

ユウタ「まあ、それは履修要綱をよく読め」

リョウコ「そう。ユウタくんの言うとおりにね。卒業のために必要なことは学科ごとに違っているから、自分が卒業するために何が必要か、きちんと確認しておく必要があるわね」

ヒロシ「うわ！ 僕、確認してなかったです」

リョウコ「あとね、さっきヒロシくんが言っていた、授業に出席するというのも、すごく大事なことのよ」

ユウタ「授業回数の3分の2以上は出席しなければならないって言いますよね」

リョウコ「それは『最低でも』！ まずは全部の授業に出席するのが当たり前と思わなきゃ！！」

ユウタ「出席日数が足りないと、テストを受けることすらできなくなっちゃうんだぞ。とにかく出席は必須条件だ」

ヒロシ「了解です、何があっても授業には出席するようにします！」

ユウタ「あ、そういえば……」

リョウコ「あら、どうしたの？」

ユウタ「ヒロシは資格は取るつもりでいるのか？」

ヒロシ「はい、将来のために必要なので」

ユウタ「それはいいが、必修科目の単位だけは何かあっても落とすなよ？」

ヒロシ「どういうことですか？」

ユウタ「下手をすると、学科の必修科目と、資格の科目がバッティングするぞ。最悪、卒業を優先して、資格取得を泣く泣く後回し、ということにだってなりかねないからな」

リョウコ「必修単位を落とすと、次の年に履修し直すことになって、そのせいで受けたかった授業を取り損ねたりすることもあるしね」

ヒロシ「そ、そんなこともあるんですね……。勉強になります」

ユウタ「まあ、経験者が語るんだから間違いはないぜ☆」

ヒロシ・リョウコ「……………」



2. 授業について 講義編

●授業の選びかた

ユウタ「授業を選ぶときに重要になるのはシラバスですよ」

リョウコ「そうねえ。シラバスは大事ね。授業の内容だけでなく、その先生の評価の基準や、試験の方法も分かるもの」

ユウタ「俺は文章書くのが苦手だからさ、なるべく出席重視の授業を取ったりしてたな」

リョウコ「私は試験より、レポートのほうが得意だから、そっちを取るようになっているわ。ただ……」

ヒロシ・ユウタ「ただ？」

リョウコ「恥ずかしい失敗をしてしまったのよ。レポート科目にこだわりすぎてしまって、レポートを8本同時並行で書かなければいけなくなった時は、少し後悔したわね」

ユウタ「うわー。リョウコ先輩でもそういう失敗するんですね」

ヒロシ「なるほど！ 得意そうな科目を優先的に選んでもいいけれど、自分のキャパシティを超えないように気をつけろってことですね！」

ユウタ「あと、その授業が、必修か、選択か、専門科目か教養総合科目か、共通領域科目かどうか、そういうこともしっかり見ておけよ？」

リョウコ「好きな授業ばかり取っていると、卒業できなくなっちゃうかもしれないわね」

ユウタ「先を見越してしっかり授業を取ること、これ結構大事だからな」

ヒロシ「履修計画を立てるのって、すごく大切なことだったんですね！」

●授業の受けかた

リョウコ「ねえ、ヒロシくん。『はじめの一步』という冊子を知っているかしら？」

ユウタ「某ボクシング漫画ですか？」

ヒロシ「違うと思いますユウタ先輩。えっと、知らないです」

リョウコ「実はね、入学時にみんなに配布されているのだけれど、とっても役に立つのよ。ノートの取りかたの工夫とか、レポートの書きかたなんかも載っていたりするわ」

ユウタ「うわっ！　すごい！　分かりやすい！！　レポートってこう書くんだ！！　俺参考にしよう」

ヒロシ「何でユウタ先輩のほうがテンション上がっているんですか。でもすごいですね。こんな便利な本があったなんて知らなかった。友達にも教えてやろう」

リョウコ「そう、とてもいい冊子でしょう？　と、いうよりなぜ二人とも知らないのよ……」

ユウタ「いやあ、ちょっと……」

ヒロシ「目を通さずに行方不明で……」

リョウコ「あなたたち……配布される資料に無駄なものはないんだから、一度でいいから目を通しなさい！　それで必要かどうかの判断をしなきゃだめよ」

ヒロシ・ユウタ「はい……」

ユウタ「ところで、リョウコ先輩ってどんなふうノート取ってます？」

リョウコ「わたし？　わたしはこんな感じかしら」【リョウコ先輩のノート参照】

ユウタ「さすがリョウコ先輩、綺麗なノートですね。こういうのを参考にするんだぞ、ヒロシ」

ヒロシ「はい！」

リョウコ「あら、うれしいわね」

ヒロシ「ユウタ先輩はどんな感じでノート取ってるんですか？」

ユウタ「俺か？　俺はだな……」【ユウタ先輩のノート（1）参照】

ヒロシ・リョウコ「これは……！！」

ユウタ「ふっふっふ……」

ヒロシ「字の綺麗さと、性格とのギャップが恐ろしいです、先輩」

リョウコ「え、そこ……？　付箋や記号を使う工夫に驚いているんだけど、私は」【ユウタ先輩のノート（2）参照】

ヒロシ「わ、本当だ！　この記号とか、何ですか？」

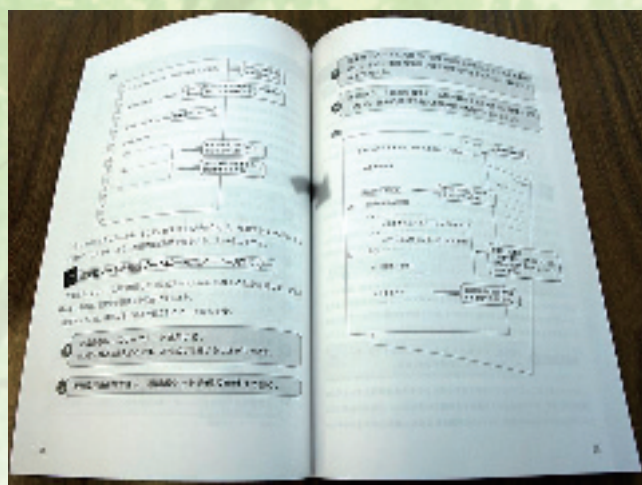
ユウタ「説明しよう！　これは、授業展開が速くても、板書やメモを取るために工夫した俺の努力の結晶なのだ！」

リョウコ「たしかに、矢印を使ったり《∴（ゆえに）》を使ったりする書きかたなら、時間短縮も図れるし、その分先生の話も聴けそうね」

ヒロシ「そこまで読むとは、さすがですね！　うん。でもすごい参考になりますよ、ユウタ先輩！」

ユウタ「へへ、それほどでも……」

リョウコ「いや、ユウタくんいい方法持っているわ。今



『はじめの一步』

度真似させてもらおうかしら」

ユウタ「もうじゃんじゃん使っちゃって下さい！」



3. 授業について 演習編

●レジュメの作りかた

ユウタ「授業にはな、いまヒロシが受けているような『講義』のほかにも『演習』っていうのがあるんだ」

ヒロシ「え、『演習』？　それは一体何の授業なんですか？」

ユウタ「あるテーマについて、自分で調べた内容をレジュメにまとめて発表する授業、ってイメージかな？」

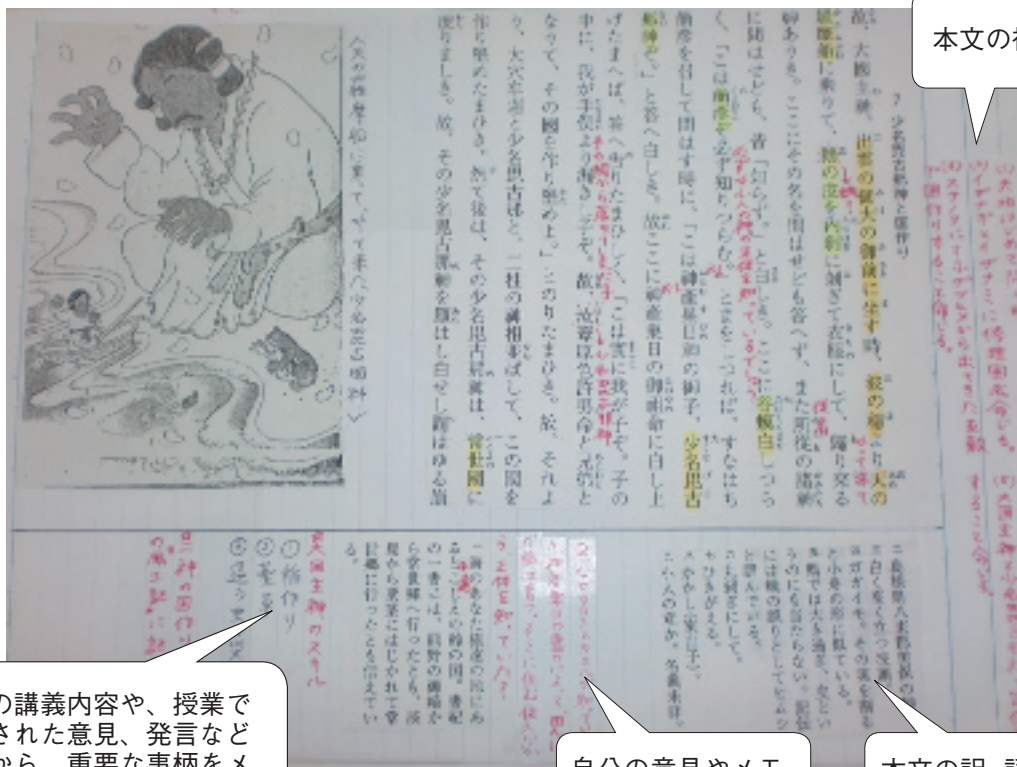
リョウコ「『演習』科目と『講義』科目の違いは『はじめの一步』に載っているわよ。そうね、ヒロシくんのためにも、作ったレジュメを見せてあげてくれるかしら、ユウタくん」

ユウタ「お安い御用です！　ほら！」（レジュメを見せる）

ヒロシ「うわー！　すごい！！」

リョウコ「とても見やすいレジュメだわ、ユウタくん」

リョウコ先輩のノート



本文の補足など

先生の講義内容や、授業で
交わされた意見、発言など
の中から、重要な事柄をメモ
する

自分の意見やメモ、
コメントなど

本文の訳・語釈・
注など

ユウタ「そうですか？ いや〜、先輩に言われると自信
ついちゃうなあ！」

リョウコ「それからね、ヒロシくん。『演習』の授業では、
最初にレジュメを作るときに注意事項を話して下さる先
生方も多いから、その指示はきちんと守るようにしてね」
ヒロシ「つまり、レジュメの体裁や分量についても先生
が教えて下さるんですか？」

リョウコ「もちろん、いつもそうとは限らないから、分
からなければ、先生や先輩にきちんと確認しておくとい
いわ」

ヒロシ「気になってたんですけど、ユウタ先輩のレジュ
メで『〇〇氏の〇〇という論文では』っていうのが出て
くるじゃないですか？ 論文ってどうやって探すんです
か？ 図書館？」

ユウタ「ここで登場するのが現代文明の利器！ ネット
上データベースなのだよヒロシくん。 大学図書館にあ
るデータベースを利用するのが一番さ！」

リョウコ「[大学図書館のホームページ](#)にはうちの大学の
蔵書以外にも、新聞記事や雑誌、論文専用のデータベー
スのリンク集が載っているのよ」

ユウタ「CiNii とか国立国会図書館とか、山手線コンソー

シアムとかな」

ヒロシ「え？ え？」

リョウコ「詳しくは、大学図書館のホームページに利用
ガイドが載っているわ」

ユウタ「職員の方に尋ねても教えてくれるぜ」

ヒロシ「こ、今度図書館に行ってみます……」

リョウコ「それから、図書館では、前期と後期に一回ず
つ、時期を指定して図書館「[文献ガイダンス](#)」を開いて
いるの。図書館を利用するための基本的なことについて、
ていねいに説明してもらえるから、それに参加するのが
一番いいと思うわ」

ヒロシ「そういうのがあるんですか！ 分かりました。
次の開催時期を確認してみます」

リョウコ「ところで、ユウタくん。この発表の際にはど
のくらい文献を読んだのかしら」

ユウタ「あー、じ、実は、この引用文献リストに載せて
いるものだけなんです」

リョウコ「あら、そうなの？ 個人的には文献はたくさ
ん読んだほうがいい気がするわ」

ユウタ「やっぱり、そうなんですかねえ」

リョウコ「うーん、一概には言えないのだけれど、資料

をできるだけ多く集めた上で利用
する・利用しないを分けたほうが、
自分の身になる気がするのよね。も
ちろん、そうすることで混乱してし
まうこともあるから、そのバランス
は難しいのだけどね」

ユウタ「そっかあ」

ヒロシ「何で、いっぱい資料が必要
になるんですか？ ユウタ先輩こ
れだけ作れているのに、まだ資料が
必要なんですか？」

リョウコ「初めに、ユウタくんが『演
習』のイメージで、レジュメを作っ
て発表するって言ったでしょ？

発表したあとには発表内容に関する
質疑応答があるのよ。そのときに

『そこは調べてませんでした』ではまずいでしょ？」

ヒロシ「確かに！ ユウタ先輩っ、読まなきゃだめです
よ！！」

ユウタ「確かにそうなんだが、俺、資料集めすぎると混
乱しちまうんだよな～。「あの資料どこいったっ
け！？」ってなっちゃう。なんかいい方法ないですかね
え？ リョウコ先輩」

リョウコ「そうねえ、私は資料が多くなる場合には、論
文ごとにホッチキスで止めたり、必要箇所にラインを引
いたりするわね。あとは、その論文に何が書いてあった
か、キーワードを付箋に書いて、論文のはじめのページ
に貼っておいたりするわ」

ユウタ「そっか。整理していけばいいんですね！

リョウコ先輩の方法でやってみようかな」

リョウコ「ユウタくんの資料は聴くひとの視点から考え
られていて、とても分かりやすいわ。そういうふうな情
報を整理できているのだもの、ユウタくんならできるわ」

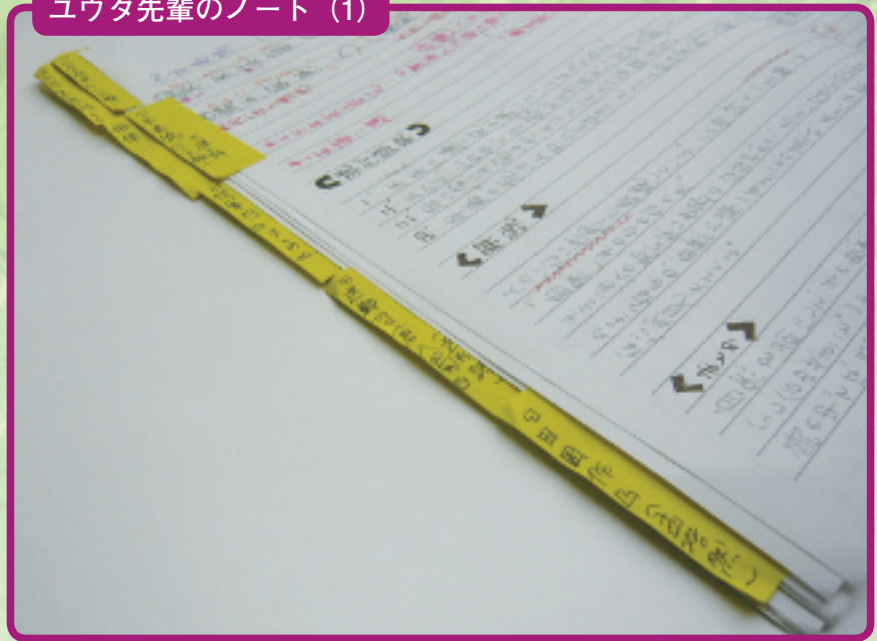
ユウタ「ありがとうございます！ 聴くひとの視点は大
事ですよ！！ 発表者の独りよがりな発表ほどつまら
ないものはないし」

リョウコ「そうね。『〇〇をご存知ですか？』とひとこ
とと言うだけでも変わってくるものね」

ヒロシ「そっかー。あ、じゃあ発表するときは、すぐく
基本的なことから入っていったほうがいいんですか？」

リョウコ「そういうわけではないの。発表内容自体は深
いところまで突っ込んでいくに越したことはないのよ。

ユウタ先輩のノート (1)



ただ、それをいかにわかりやすく伝えられるかが問題ね」

ヒロシ「うーん、そっか。そこが頑張りどころなんですよ」

●発表の仕方

ヒロシ「それにしても、ユウタ先輩のレジュメは難しい
漢字が並んでますねえ。この漢字は何て読むんですか？」

ユウタ「……………」

ヒロシ「ユウタ先輩？ どうしたんですか？」

ユウタ「読めないんだよ！ 発表のとき先生に教えても
らえばいいだろう！」

リョウコ「ユウタくん何てことをしているのあなた
は！！」

ヒロシ「え！？ あのおしとやかで優しいリョウコ先輩
が怒った！！」

ユウタ「うひゃあ！！ すみませ～ん！！」

リョウコ「読めない漢字には、せめて発表原稿だけでも
ルビを振っておく！！ 発表練習も自宅でしてお
く！！ このくらい常識でしょう！！」

ユウタ「うう～。でも面倒くさくて……」

リョウコ「もうっ！ あなた先ほど『聴くひとの視点は
大事』といていたわね。それなら、先生に漢字の読み
を聞きながら、しどろもどろで発表している発表者を見
て、聴くひとはどう思うのかしらね」

ヒロシ「あ！ そうか。いくらレジュメが見やすくても、
声が聴き取りやすくても、それじゃ聴くひとは嫌になり

ますね」

リョウコ「そうよ！ ヒロシくんの言う通り！！ あなたはせっかく発表の姿勢が良いのに、もったいないわ」

ヒロシ「リョウコ先輩、リョウコ先輩、発表の姿勢って何ですか？」

リョウコ「発表するときの心構えのことよ。そうねえ、ユウタくんはどんなことを心がけているかしら？」

ユウタ「あ、えーと、そうですねえ。発表をするときは下を向かず、聴き取りやすい声の大きさとテンポにする、とかですかね」

ヒロシ「聴き取りやすいテンポって、どのくらいなんですか？」

リョウコ「そうね、自分ではちょっとゆっくりすぎるかなと思うペースで読めば、聴いているひとには、ちょうど良いスピードに聞こえていたりするものよ」

ヒロシ「なるほど！ さすがリョウコ先輩！！」

リョウコ「ふふ、ありがとう」

ユウタ「あと、聴く側の態度ってのも発表を成功させるためには重要ですよ」

ヒロシ「え？ なぜですか？ 関係ないと思うんですけど……」

ユウタ「いやー。全然違うぜ。俺が発表を聴く側にいるときは、発表に対してリアクションをとるようにしてるな。誰からもリアクションがないと寂しいものがあるよ」

リョウコ「そうね、うなずくだけでもだいぶ違うわ。そのリアクションによって、話すときのスピードやテンポも変わってくるのよ」

ユウタ「考えてみろよ、一所懸命笑いを取ろうとしてるのに、ノーリアクションだとどう思う？」

ヒロシ「何か反応して下さいよ！ ってなりますね」

ユウタ「だろ？ スベってる感が否めない上に、テンション下がるよな。それと同じだよ」

リョウコ「なんだか少し違う気もするけど……」

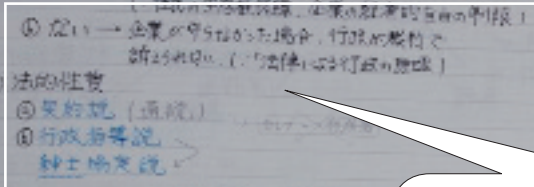
ヒロシ「聴く側の態度ってすごく大事なんですね！ 覚えておきます！」

リョウコ「発表が失敗してしまう一番の原因はね、自分自身が発表している内容に対して結論を出せていないことなのだと思うわ」

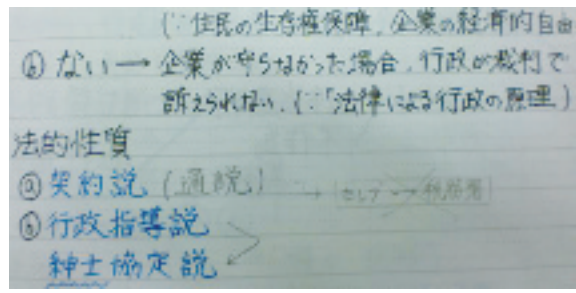
ユウタ「ああ、確かに。文献を引用してそれらしくレジュメを作ってきて、その引用で結局何が言いたいのか、意味がわからない発表ってありますよね」

ヒロシ「他人の論文をそのまま使って、自分の意見が全

ユウタ先輩のノート (2)



「∴ (ゆえに)」や「→」「＝」などの記号を使うと、素早くまとめられて便利



項目分け・箇条書きをうまく使って、簡潔にまとめてみよう

くないってことですね?」

リョウコ「そうなのよね。だから私は、自分の提示した問題に対して、自分なりの結論を出すようにしているの」



エピローグ ～相談したいときは～

ヒロシ「は～。今日は勉強になりました!! また教えて下さい!」

ユウタ「ああ、もちろんいいぜ!」

リョウコ「私ももちろんよ。先輩に分からないことを訊くのはとても良いことだわ。ただし、先輩の学年とはカリキュラムが違っていることもあるから気をつけてね」

ヒロシ「ええ!? じゃあどうすれば?」

リョウコ「大学にはね、そうした学生の悩みをサポートしてくれる場所がいっぱいあるのよ」

ユウタ「そうなんですよね。ヒロシ、お前入学したとき、**エルダーサポーター**の人に相談に乗ってもらってただろう?」

ヒロシ「ああ、あの、紺のジャンパーの人たちですよ」

ユウタ「あれはな、俺たちの先輩なんだよ。履修の仕方がわからない新生の相談に乗ってくれているんだ」

ヒロシ「なるほど、先輩だから、自分の経験を踏まえていろいろと教えてくれそうですね」

リョウコ「あとは『**学修支援センター相談室**』ね」

ヒロシ「学修支援センター相談室?」

ユウタ「3号館の3階にあるんだよ。こくびょんが印刷されたポスターを見たことってないか?」

ヒロシ「そういえば、そこかしこに貼ってあった気が……」

リョウコ「そう、そこでは大学の学修に関することの相談に乗ってもらえるのよ。ヒロシくんが最初に言っていた『卒業できるか不安』という悩みなんかも、ここで相談すると良いわね」

ヒロシ「へえー、相談を受け付けてくれるところはいろいろあるんですね……って、リョウコ先輩ずいぶん詳しいですね」

ユウタ「おいおい、リョウコ先輩なら当たり前だろう?先輩は全てご存知なんだよ」

リョウコ「ふふ、違うのよ。私『相談室』で相談したことがあるの」

ヒロシ・ユウタ「え?! そうなんですか?」

リョウコ「実はね、私も1年生のときは不安だったの。

『授業についていけないかも』って」

ユウタ「ええ!? リョウコ先輩が!?」

ヒロシ「成績優秀で、皆に頼られるリョウコ先輩も昔はあまり優秀じゃ無かったってことですか?」

ユウタ「おい! 失礼だろ!」

リョウコ「ふふ、いいの。そうなのよ。昔はダメダメだったの。でもこれではいけないと思ってね、『相談室』に相談に行って勉強の仕方を教えてもらったのよ」

ヒロシ「へえー」

ユウタ「一度行ってみようかな」

ヒロシ（今ではすごく頼りになるリョウコ先輩も、昔は僕と同じダメダメだったんだ。じゃあ、僕も、きっと……）

ユウタ「ん? ヒロシ、どうした?」

ヒロシ「いえ、ユウタ先輩! リョウコ先輩! ありがとうございます!! 僕、頑張ります!!」

ユウタ「お? おう、頑張れ!」

リョウコ「ふふ、ええ、頑張っってねヒロシくん。ユウタくんも発表練習きちんとするのよ」

ユウタ「うえ～。はい。」

【作成】 学年・50音順



杉山 美幸 (文学部日本文学科4年)

田邊早和子 (文学部日本文学科4年)

吉田 有希 (経済学部経済ネットワーク学科4年)

阿久津恵美 (神道文化学部神道文化学科3年)

杉本 亮佑 (法学部法律学科法律専攻3年)

塩澤嘉那子 (文学部日本文学科2年)

※本記事に取り上げた、学修態度に関する様々な意見・発言は、全て編集に携わったSAの個人的見解によります。

特集「どうですか、國學院は？」 —新任教員の感想記—

池上 英洋(文学部)



國學院大学文学部哲学部の教員になって、そろそろ二年目が終わろうとしています。

それまでは、都内の小さな女子大にいましたから、最初はその雰囲気のアマリの違いに戸惑うことも多く、そのたびごとに同僚の先生方や事務の方々に助けていただきました。この場をお借りして感謝いたします。

両校の教育システムや学生気質の違いのようなものも少しずつわかってきたので、他校との比較を通じて自分たちを客観的に見ることも無益ではないと思い、ここに少し書かせていただくことにします。

小さな女子大の利点は、講義やゼミなどの規模が小さいこと、そのため教員と学生との距離が近いこと、個別対応が容易なことです。ゼミの規模が小さければ、顔を覚えるのも早いですし、体調やメンタルの変調にもすぐに気がつきます。誰かが特定の課題でつまづいていれば、

そこだけ少し個別に補完して、常に進度やレベルの差をなくしつつ全体運営することができます。

ゼミが一年生からあるのも前任校の特徴で、一年前期にはまず文章を読む訓練、後期には概要をつかむ訓練、二年前期には…といった具合に、卒論まで丁寧

にステップを踏んだ指導をおこなうことができます。この方法であれば、卒論を書くころにまだ「注と文献表の違いは何ですか」などといった質問をしに来るような学生は出てきません。

一方、現所属学科では、一度もその教官のゼミをとったことのない学生が、いきなり卒論指導教官に指定してくることさえあります。

前任校のシステムにもリスクはあります。ゼミがずっと同じメンバーなので視野が狭くなりやすい、他のメンバーや教員と合わない場合の学生の苦痛が大きいといった点が挙げられるでしょう。

國學院大学文学部も、学科によってカラーが違うのは興味深い点です。哲学科は伝統的に放任主義なので、もし前任校のようなシステムを導入しようとするれば、アレルギー反応が出てきそうです。放任主義ならではの良さが失われるリスクもあるでしょう。ですが、学生達の気質も生活環境も変化していますから、今後はある程度、手順を踏んだ指導が必要になるだろうと思います。

どこまでプログラム化して、どこから放任すべきなのか。まだ二年目なので現時点ではさっぱりわかりませんが、これからも学生と向き合っじっくりと見定めつつ、両システムの間で良いバランス、本校の学生にとって最適なバランスというものを、今後も模索していきたいと考えています。



尾崎 麻弥子(経済学部)



このたびは、原稿の依頼をいただきまして誠にありがとうございました。経済学部で西洋経済史を担当しております尾崎麻弥子です。

専任として大学に勤めるのは本学が初めてなのですが、それまでもいくつかの大学で西洋経済史や欧米史などの授業をさせていただいておりました。そのたびに思いますのは、それぞれの大学ごとにカラーがあり、同じ授業内容でも相手によってまるっきり違うものになるということ、まさに授業は一期一会であり、「ライブ」であるということでした。

本学で授業をしていて感じることは、細やかな感受性をもつ学生さんが多く、こちらも細かな配慮をすることが必要であるということでした。一年目はよくわからないまま場当たりの対処をしてしまった側面もありますが、特に二年目から授業時にコメントペーパーを配布するようにしましたら非常に授業の内容および手法に関して細かいコメントがたくさんあったことに驚きました。すべての要望に応えることはできませんが、授業の終わ

りのアンケートではその学生さんたちに対して改善することはできませんのでたくさんの意見をいただけることは大変ありがたいと思っています。反面ペーパーにはいろいろなコメントしてくれるものの授業内での発言・目に見える反応という点に関しては少しおとなしいように感じます。

もちろんなかには積極的な方もいらっしゃいますが、真面目に勉強していてそれなりに知識も問題意識もあるのになかなかそれをうまくアピールするのが難しい、というケースをよく目にします。こちらの引き出すスキルもまだ訓練不足の面があると思いますので、お互いに努力したいと思っています。

授業運営で工夫していることですが、私の専門は西洋経済史ですので、西洋においてどのように経済活動がおこなわれてきたかということについて講義・演習をおこなっています。「西洋（とくにヨーロッパ）」に対して正しい理解とイメージをつかんで欲しいのでスライドなどの映像資料をよく使います。当時の経済状況をよく反映していて授業の内容で教えたことが端的に表現されており、なおかつストーリーも楽しめる映画などを選び鑑賞することもあります。登場人物に対する共感から始まって、時代背景に関心をもって学ぶいいきっかけになればと思います。

最後に大人数の授業ではSAの方に非常に助けていただいております。ここでお礼を述べさせていただきたく思います。ありがとうございました。



寺本 貴啓(人間開発学部)

「問題解決の視点」をもつための知の共有

初等教育学科では教師を目指す学生が多く、自らが教師になった時に、「授業をうまく行うにはどうしたらいいのか」、「保護者対応をどうしたらいいのか」など、教師としての具体的な対処への興味や関心が高いようである。しかし実際の場面では、毎回異なった状況で問題への対応を迫られることが多く、解決方法を一つ知っておくだけでは不十分である。また、大学の授業において、ある解決方法を頭で理解していたとしても、指導者の個性や経験、知識が異なれば、問題へのアプローチの仕方も変わるため、学んだことがそのまま自分自身に適用できるとは限らない。そのため、時間をかけて自分に適した問題解決の方法を見つけ出さなければならないのである。つまり教師になる上で求め続けることは、「HOW: どうやればいいのか」といった、Q&Aのような一つの答えだけを知るのではなく、「WHY: なぜそのようにしたのか」といった「問題解決の視点」を多くの人から知り、自分に適した方法を発見することであるといえる。

1. 発見の数が経験の数となる

一人で問題を解決する場合、自分自身の経験を根拠として判断する。判断の正しさは、経験の量に影響を受けることが多く、経験が少ないと間違った判断をする可能

性が高いといえる。しかし経験が浅いうちは、判断の違いを恐れず、積極的に「どうして間違ったのか」と考えることの方が重要である。なぜならば、その原因を考えることで、自分の課題を改めて発見できるからである。つまり、間違いの原因を考えることは、自分自身に足りなかった「問題解決の視点」を新たに発見することにつながり、また一つ経験を積むことにつながるのである。

2. 「知の共有」のための協同学習

自分一人で経験を積むには、多くの時間を要する。そのため、集団で学習している大学の授業においては、一人一人それぞれの経験や考えを共有する機会をつくることが、「問題解決の視点」を増やす点で有効であると考えている。また、同世代(同学年)で直面する課題は、同様の内容が多いため、学生共通の課題を解決する上でも効果的であるといえる。

「理科概説」(2年生後期99名)では、協同学習による「知の共有」を目指した学生参加型授業の実践(写真は、デジタルペンを使った情報共有の一事例)を行っている。本講義では、小学校の授業で行う実験などを行いながら、その方法や考え方を学ぶ。それは、単なる指導の方法(どうやればいいのか)や知識(学習内容など)の伝達だけではなく、教師の指導意図や子どもの考え方をもとにした指導の方法(なぜそのようにしたのか)について検討することに重点を置いている。したがって、一方的な講義形式ではなく、学生との対話的講義により、学生の考えを引き出し、「知の共有」が可能となるのである。



大学授業最前線

－教員の努力！学生のまなざし！（5）－

「大学授業最前線」は、國學院大學で素晴らしい授業を行っている先生方に、その努力と工夫について語っていただくコーナーです。シリーズ第5回目は、法学部教授の中川孝博先生に、「裁判法A」の授業において工夫していることを紹介していただき、併せて、この授業から何を学ぶことが出来たのかについて、現在受講している学生と、受講し終えた学生にもコメントしてもらいました。



教員の授業努力



「裁判法A」
中川 孝博
(法学部教授)

1. はじめに

裁判法Aは刑事訴訟法の入門講義です。法律学に触れて間がない法学部1年生を主な対象とする授業ですから、法学入門でもあります。毎年約300人が受講しています（2コマ開講し、学生を2分している。増コマにはなるが、300人授業1つの場合よりも運営は楽）が、これら大量の学生が、挫折することなく法学の世界、そして刑事訴訟法の世界に興味を持ち、基本的な力を身につけ、自信と意欲をもって今後学習していくよう誘うことがカリキュラム上期待されています。さまざまな仕掛けを施していますが、その中核となるのが「チーム制」です。この制度に焦点をあてて紹介しましょう。

2. チーム制の概要

(1) チーム編成の方法とルール

10年度より、学生がチームを組んで様々な作業にあたる「チーム制」を導入しています。強制はしませんが、チームに属しないと課題の添削を受ける権利を与えない等の条件を呈示して、チーム所属へと強く誘います（11年度のチーム所属率は97.0%）。チーム編成形態には2種類あります。自主編成チームと、新たな友人関係を作りたいと望む学生にエントリーさせ私がランダムにチームを編成するランダムチームです（11年度はあわせて70チームが誕生した）。

11年度からは、チーム作業を有効に行わせるために、①欠席4回でチーム強制除名、②後述の授業外課題3回未提出でチーム強制解散というルールを設けました。成績評価は期末試験一発で行うので、これらルールの「鞭」の力はそれほど強いとも思いませんが、最終的に強制除名者の数は14名（チーム所属者の4.7%）、強制解散チームは2つにとどまりました。

(2) 意欲喚起の方策としてのチーム制

学習動機を、内容分離的動機——関係志向（他者につられて）、自尊志向（プライドや競争心から）、報酬志向（報酬を得る手段として）——と、内容関与的動機——充実志向（学習自体が楽しい）、訓練志向（知力をきたえるため）、実用志向（仕事や生活に活かす）——とに分け、やる気を引き出す方策として、前者から入りつつ、後者を高めていくことを奨励する見解があります（市川伸一『学ぶ意欲の心理学』）。チーム制は、このような方策を学生がとりやすくするものです。チームで作業すれば、「他者につられて」学習し、チーム仲間や他のチームとの関係で「プライドや競争心」が刺激されやすくなりますし、そうやって学んでいくうちに、法学によっていかなる力が向上するのかがわかってくるし、法学の知識も身に付いてくるので、内容関与的動機も刺激されやすくなるというわけです。



模擬裁判の風景（冒頭手続）

（3）チームが行う作業

チームが行う作業には、授業内のものと授業外のものに分けられます。授業内では、適宜私が投げかける問いに対し、チームで話し合っ代表が答えます。私の問いは授業内容の理解度を試すものが主となりますが、たまにイレギュラーなタスクも入れます。突然教室内で窃盗事件を生じさせ（お芝居です）、警察官役と目撃者役とに分かれて取調べを行い、調書を作成させてみたり、模擬裁判を学生自身に演じさせてみたりしています。

これらの作業により、正確な知識理解、集中力持続、イメージの具体化等をサポートします。ちなみに、授業そのものはオーソドックスなレクチャー方式が主です。授業内の協同学習はアクセントにすぎません。

チーム作業の本筋は授業外にあります。ほぼ毎回小論

文課題を出し、これをチーム単位で提出させます（1チーム1通という意味）。特定個人が書いたものをたたき台にし、チームで議論し、チームメンバーの修正意見を付けたうえで提出することになります。この修正意見もみて採点・添削し、次回授業時に返却します。この授業外課題はそれなりにハードなもので、個人単位でこの課題をやり続けるのは難しいのですが、チームの力によって遂行力を上げることができます。チーム制未導入の09年度にはこの課題を個人単位でさせていましたが、提出した学生は毎回10%（30人）程度でした。これに対し、11年度は平均93.3%の提出率（65チーム）となっているのです。しかも、チームの事前

検討を経た答案ですので、良いものが多く、添削が楽です。

各チームの成績は一覧表にして授業専用webページで公開しています。そして、毎回の授業冒頭時にAをとったチームのメンバーを立たせ、全員の拍手でもって称えます。

3. チーム制の効果はペーパー試験に出てくるか？

原稿執筆時点では11年度の期末試験がまだ実施されていませんから、毎年授業半ばに行っている「お試し中間試験」（成績評価の対象にはならないが、期末試験と同じ形式の試験を行い、授業半ばの学習成果を問い、これまでの学習方法をふりかえるためのもの）のデータを比較してみましょう。



模擬裁判の風景（証人尋問）



チームで議論！

チーム制をとる前の09年度では、お試し中間試験の参加率65.1%、平均点43.6点、これが期末試験だったとしたら合格率15.7%でした。それに対し11年度のデータはそれぞれ88.5%、61.2点、58.0%でした。劇的な変化といっ
て良いでしょう。絶対値としてはまだまだ満足できる数字ではありませんが。当分は、以上のような授業形態を基本的に維持しつつ、さらなる向上を目指して改善を続けていきたいと思っています。

受講生からのコメント

①Aさん（法学部1年）

私は前期の授業が終わった後、論述問題の答案の書き方が分からず悩んでいました。人数の多い法学部の講義は期間内試験を重要視した評価を行うことが多く、その形式は論述問題である講義もあります。それにも関わらず、法律学特有の文章の書き方についての具体的な説明がなく、どのように記述すればいいのかわからずにいるからです。後期の授業を選ぶとき、シラバスに1年生のうちにこの授業を受けるべきであると豪語した記述があり、そこまで言うのならば、と思い受講を決めました。豪語していた理由が今では分かります。この授業を受けていなければ、1年生のうちに論述の仕方が分からないという悩みが解消されることは無かったであろうと思うから

です。

この授業は法学部の他の授業とは違い、グループ演習による提出課題が頻繁に出ます。グループは3～6人で構成され、授業中の先生との受け答えや課題を提出するときに協力し合います。グループに参加するかどうかは個人の自由です。しかし、グループに所属していなければ課題を提出する権利を得られないためグループに所属している人が多いです。課題の内容のほとんどは論述であることが多く、法的な論述をする方法を身に付けることがこの講義の目的となっています。そのため、内容よりも指定された記述ができているかどうかが一番の問題となります。提出された課題は先生自ら添削をし、返却するので反省点が分かり、今後の学習をする上で便利です。欠席を繰り返せばグループから外され、グループの一員であることで得られる恩恵を受けられなくなります。その結果、出席することが評価に直接的な関係がないにも関わらず、欠席率がとても低いです。

始めのうちは、隔週程の頻度で出される課題を少し疎ましく思っていました。けれど、今ではこの授業を受けて良かったと心から思っています。まだまだ完璧ではありませんが法的な論述の方法の基礎のキを習得することができました。以前は何をどうすればいいか見当もついていませんでしたが、一つの道標ができたような気がします。この講義で学んだことを活かした上で、今後他の学習につなげていきたいです。

②Bさん（法学部2年）

中川先生の裁判法 A の授業は、法律専攻の生徒が1年生のときに取れる授業の中で唯一の刑事法の授業です。刑事法の入門的な授業で、刑事法を勉強したいと思って法学部に入った私にとっては開始前からとても楽しみにしていた授業でした。

この授業は、先生の話聞き板書を写す……といった普通の講義形式の授業ではありません。生徒同士でチームを作りディスカッションをしながら課題を作成します。チームのメンバーとともに課題を進めるので、自分の考えだけではなく人の考えも聞きながら勉強でき、視野を広げることができます。最初はうまく書けなかった法的意見表明も、評価は厳しいですが先生が丁寧に添削して下さるので、課題を進めるごとにコツをつかめるようになります。また、ほかの授業でも応用できるのでとても役に立ちます。

授業の一番の魅力は、課題内容のおもしろさにあると思います。

グループ内で役割を決め、講義中に発生した窃盗事件について検討しました。その中で取調べを行い、それに基づいて調書などを作成したりしました。また、國學院



チーム代表が報告！

大学内での架空の事件を題材とした課題があり、シリーズになっていて、毎週毎週どのような展開になるのかとても楽しみにしていました。

課題の量は1年生で受けるほかの授業に比べ多く、すべてをこなすのはとても大変でしたが、課題の内容が面白いので、楽しく取り組むことができました。この授業を通して、刑事法をどのように考えていくのかを学び、2年生になってから始まった刑法科目を勉強する中で、理解の手助けになっています。

この授業はとても面白く、1年生のうちで唯一の刑事法の授業だったので、私の中ではとても大きなものでした。1年生の皆さんには絶対おすすめしたい授業です。



すし詰め教室（出席率の平均は86.7%）

教育開発推進機構彙報

(平成23年7月1日～12月31日)

※職名等は当時のもの

会議

○運営委員会

第2回：10月12日 第3回：11月2日

○國學院大學FD推進委員会

第3回：10月5日 第4回：12月7日

○教育開発センター委員会

第4回：10月5日 第5回：12月7日

○共通教育センター委員会

第4回：7月28日 第5回：9月20日

第6回：10月19日 第7回：12月7日

○学修支援センター委員会

第4回：7月27日 第5回：10月12日

第6回：11月9日 第7回：12月7日

FD活動、教育支援

10月1日 平成23年度第2回新任教員研修

12月17日 FDワークショップ(平成23年度第3回新任教員研修)開催

講師：本機構 柴崎和夫、立命館大学教育開発推進機構 林泰子

行事

○シンポジウム

11月12日 國學院大學人間開発学会第3回大会 公開シンポジウム「現代武道の人間開発力—日本の身体文化から何を学ぶべきか—」

主催：國學院大學人間開発学会・國學院大學人間開発学部

共催：本機構

○教育開発懇話会

7月6日 第6回「いかに学生と向き合うか—学修支援センター相談室1年8ヶ月の歩みから—」(報告会)

報告者：鈴木崇義(本機構助教)

○研修会等

7月30日 前期SA(スチューデント・アシスタント)最終報告会

10月1日 後期SA(スチューデント・アシスタント)研修

11月19日 後期SA(スチューデント・アシスタント)中間報告会

出張等

9月1～3日 鈴木助教、川島書記、日本リメディアル教育学会第7回全国大会(於佐賀大学・福岡大学)に参加

9月7～9日 中山准教授、(社)日本私立大学連盟主催、マネジメントサイクル修得研修に参加(於京都国際ホテル)

9月8～10日 鈴木助教、内藤書記、スチューデント・コンサルタント基礎研修講座及び認定試験を受講(於東京大学本郷キャンパス)

11月2日 中山准教授、全国私立大学FD連携フォーラム・実践的FDプログラムワークショップに参加(於立命館大学草津キャンパス)

11月25日 中山准教授、小濱助教、中部大学ヒアリング訪問

12月1日 中山准教授、全国私立大学FD連携フォーラム会員校ミーティングに参加(於立命館大学東京キャンパス)

12月9～10日 加藤機構長、中山准教授、新井助教、山形大学出張

12月12日 中山准教授、小濱助教、地域科学研究会「新・学生募集確保策の発想・工夫と展開Ⅱ」(於中央大学駿河台記念館)に参加。

12月16日 中山准教授、新井助教、地域科学研究会「PBL教育の最新動向—評価と深化シナリオ—」(於日本教育会館)に参加。

刊行物

7月30日 教育開発推進機構NEWSLETER『教育開発ニュース』第4号

教育開発推進機構新任職員紹介



門平浩司 (教学事務部教務課主任)

通算10数年の教務課経験を活かし、全学的な教育改善などの機構業務に寄与したいと思えます。また、現在の社会状況を反映して、学びに関わる悩みや不安を抱えている学生さんも少なくないようです。学修支援センター相談室では、学生の皆さん一人ひとりのより良い修学のために努めてまいります。よろしくお願いいたします。



大愛理歌 (学修支援アドバイザー)

今年度10月からセンターの業務をお手伝いさせていただくことになりました。直接学修相談に関わることはありませんが、学生の皆さんが自分らしさを大切にしながら豊かな大学生活を送れるよう、陰ながら少しでもお手伝いさせていただければと思います。学修支援センター相談室では、履修や単位の取り方、勉強の進め方、レポートや卒論の書き方等についていつでも相談に乗っています。些細なことでも構いませんので、気軽に覗いてみて下さい。

■ SA (スチューデント・アシスタント) 募集 (予告)

教育開発推進機構では、大人数教室での教育効果向上を目指して、SA (スチューデント・アシスタント) 制度を実施しており、各セメスター開始時に SA を募集しています。

[対象] 2年生～4年生 (留年者・卒業延期者は不可)

- [内容] (1) 教材・資料の準備 (印刷・運搬のみ) および配布
(2) 出席カード、コメント・ペーパー等の配布・回収・整理
(3) 授業評価アンケートの配布・回収
(4) AV 機器等の運搬・設定準備及び操作
(5) 小テスト・レポートの配布・回収

※スチューデント・アシスタントは成績評価に関わる業務は行いません。

採用期間・給与等については募集時に学内に掲示します。

そっ たく どう じ 啖 啖 同 時 — 編集後記 —

第5号は、本機構中山郁准教授による山形大学における学生主体型授業の取り組みの紹介、SAによる大学での学びについての特集、國學院に着任して2年目を迎えた教員の授業感想記と、バラエティに富んだ内容となりました。学生にとって、大学での学びというと、つい試験対策や卒業論文のことなどが気になりがちですが、SAの特集では、ノートの取り方や、演習における発表準備の仕方など、日常的な学修の「コツ」について知ることができるものとなっています。新入生の方々にも参考になるのではないのでしょうか。また、シリーズ「大学授業最前線」では法学部の中川孝博教授の授業を紹介させていただき、本号をもって、5学部を一通り取り上げることが出来ました。これからも、様々な授業運営の工夫を紹介していきたいと思えます。(鈴木)

教育開発推進機構 NEWSLETTR 『教育開発ニュース!』第5号 平成24年1月30日発行

発行人 加藤季夫 編集人 鈴木崇義・小濱歩

発行所 國學院大學教育開発推進機構 〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28